

調査報告

## 子牛の呼吸器疾患の診断、治療、予防に関する全国アンケート

乙丸孝之介

家畜感染症学会事務局、鹿児島大学共同獣医学部

子牛の呼吸器疾患に関する取り組みを知るために全国アンケート調査を実施した。アンケートには臨床に関わる獣医師 357 名にご回答いただいた。アンケートの内容は、子牛の呼吸器疾患の診断、治療および予防についてとした。その結果、病態把握のために主に基準としているものについては、肺音という回答が最も多く、次いで体温、呼吸数であった。呼吸器疾患の診断のために主に行う臨床検査については、特に検査しないが最も多く、次いで、血液一般検査、血液生化学検査であった。感染性呼吸器疾患の起病病原体を推測（把握）する上で、実際に重視しているものについては、臨床症状が最も多く、次いで、過去の疾病発生状況であった。治療については、第 1 選択薬で哺乳期、子牛育成期ともにペニシリン系という回答が最も多く、次いでフェニコールであった。第 2 選択薬は哺乳期、子牛育成期ともに 75% 以上がニューキノロン系であった。また、薬剤の継続使用期間は、哺乳期、子牛育成期ならびに第 1、第 2 選択薬ともに 70% 以上が 3 日で最も多かった。薬剤選択に症例発生農場における過去の薬剤感受性情報を利用しているかについては、ほとんど利用していないが最も多く、次いで少ししているであった。呼吸器病発症予防のために抗菌剤については、ほとんど利用していないが最も多く、次いで、少ししているであった。呼吸器病症状が重度の場合の抗菌剤以外の併用する薬剤については、非ステロイド系抗炎症剤が最も多く、次いで輸液剤、ステロイド系抗炎症剤の順であった。治療と診断を行う上で注目する臨床所見については、体温が最も多く、次いで肺音、食欲であった。治療と診断した後抗菌薬を投与については、投与しないが最も多く、次いで 1～3 日間投与するであった。呼吸器疾患の予後判定のための主に基準としているものについては、肺音が最も多く、次いで外見的な症状（活力など）、食欲、体温であった。子牛の呼吸器疾患の多い農家と少ない農家での違いについては、換気状況、飼養密度（1 頭あたりの飼養スペース）、子牛の栄養状態、牛床の状態、牛舎内の温度の順であった。呼吸器疾患を管理指導（予防）する上で、重要だと思うことについては、換気状況、飼養密度（1 頭あたりの飼養スペース）、子牛の栄養状態、牛床の状態、牛舎内の温度の順であった。本アンケート調査は、家畜感染症学会の平成 28 年度事業計画に則って行われたが、アンケート結果を臨床獣医師の方々、生産者の方々などに活用していただければ幸いである。なお、本アンケートについての詳細については、本誌 6 巻 3 号（2017）に掲載している。

### Abstract of Investigation Report

The reports of questionnaire about the diagnosis,  
treatment and prevention of respiratory disease in calves

Konosuke Otomaru

Joint Faculty of Veterinary Medicine, Kagoshima University  
1-21-24 Korimoto, Kagoshima, 890-0065, Japan  
Tel: +81-99-285-8750 Fax: +81-99-285-8751  
E-mail: otomaru@vet.kagoshima-u.ac.jp